

# 令和3年度 第1回学校運営協議会が行われました。

日時：令和3年7月14日（水）13:30～15:00

場所：広島県立西条特別支援学校 会議室

出席委員：船橋 篤彦（広島大学大学院教育学研究科専任講師）

須藤 哲史（広島県立障害者リハビリテーションセンター若草療育園園長）

澄川 利之（広島県立西条農業高等学校校長）

渡邊 絵美（広島県立西条特別支援学校PTA会長）

藤本 奈々（広島大学特別支援教育教員養成コース）

吉迫 基全（広島県立西条特別支援学校校長）

## 1 校長あいさつ

学校運営協議会の趣旨に照らし、今年度から主任等も参加させることとした。学校経営計画を説明後、本日までの取組の一部を紹介するので、ぜひ忌憚のない御意見や御指導を賜りたい。

主任にとっても、委員様からの御意見等に直接触れさせていただくことは貴重な学びの機会となり、今後の主体的な分掌経営につなげてくれることを期待している。

児童生徒の成長につながるさまざまな取組に挑戦していく中で、委員の皆様方にもお力添えをお願いすることもあると思うので、その際には、ぜひ、御協力いただきたい。

## 2 学校説明①

○令和3年度学校経営計画について（本校）

○令和3年度学校経営計画について（八本松分級）

○令和4年度教科書選定について（本校・八本松分級）

## 3 学校説明②

○令和3年度西条特別支援学校構想図教職員の取組

### （1）生徒指導部の取組

構想図の中の児童生徒の取組として今年度新たに平和教育発表会を持った。昨年度までは平和集会として行っていたが、「集会」では集まることが中心になり、教員主導になりがちのため、児童生徒が「学んだことを発表する会」と変更した。今年度はリモートで各教室とつないで実施した。様々な実態に合わせた発表方法で取り組むことができ、教員側も良い勉強になった。

### （2）保健安全部の取組

・緊急事態宣言発令により、体育祭は保護者参観を無しにして各学部が、密にならないことや時間制限等がある中で工夫して実施した。開会式、閉会式は生徒会が中心になって進め、リモートで教室につないだ。

・安心安全のための環境整備に取り組み体育館ギャラリーを整理した。また、教室内の整備や車いすの置き方等についても整理していくことが必要と考えている。

### （3）教育研究部の取組

今年度は、全員がICTを使った研究授業を行う。iPadは以前から活用しているが、今年度はスマートスピーカーの活用にも取り組んでいる。肢体不自由の児童生徒は手指の動きの難しさがああり、ICT機器の操作に集中していると思いが止まってしまい学習が定着しにくい。現在48%の教室にスマートスピーカーとディスプレイを接続して配置している。

## 4 協議

(澄川委員) 経営目標がわかりやすい。小、中、高の段階に応じて接続ができていくのが良い。情報の共有ができていくところが素晴らしい。コロナの状況は変わらないが我々も知恵ができた。Wi-Fi がつながるようになるともっといろいろなことができる。西条農業高校では教室に Wi-Fi が整備され、使い勝手がよくなった。児童生徒が ICT をどのように使いこなせるか、楽しみだ。高校では総体などいろいろなイベントを無観客でやるなど実施を工夫している。昨年までのことを糧に工夫して、子どもたちの発信の場として他の学校と共有する、保護者に配信する等のアウトプットする場を作っていくと子どもたちにプラスになる。

(渡邊委員) ICT は高等部に入って購入したが、家ではあまり興味を示さない。どのように活用していけばよいのかもっと知りたい。

(船橋会長) ICT の活用について保護者にもっと説明していく必要がある。

(須藤委員) ICT は学びを平等化してくれる。読めない、書けない子たちにとってもコミュニケーションがとれる。体が動かさなくても生活につながるが見られてほくほくした。

(船橋会長) 学校運営協議会は学校の応援団であり、辛口の友人。評価指標が適切か、改善につながる指標か。保護者への発信は見ているのか見えていないのか。どのような情報が欲しいのか。作品展などは来場者の感想を子どもたちに返して次につなげる等、物差しを校内で吟味してほしい。

構造図に地域との協働があるが、自治会とのつながりはどうなっているか。自力通学の生徒は触れ合う可能性がある。学校に密着した地域性を考えることも必要である。

## 5 閉会

### ○校長謝辞

貴重な御意見をありがとうございます。自分自身も特別支援教育を一から学んでいるところ。逆に新しい視点で見渡していきたいと考えている。主任へも科学技術の進展にともなって大きな変革が来るだろうから、それを踏まえて特別支援学校としての教育活動について考えていこうと話をしている。教員自身がチャレンジしていく。次にまた進歩したものをお見せしたい。

